関わる気持ち

取手市立取手第一中学校一年
齊藤　汎志

今年の夏休みに入る三日前、お母さんは入院をした。二年前に左ひざを痛めて、更に今度は右ひざも痛めて、手術をするからだ。

その話を聞いた時、ぼくはすぐに、お母さんが入院をしている間、ご飯はどうするのか、洗濯はどうするのか、心配になった。お母さんはぼくの心配を予想して、ご飯の炊き方、洗濯のやり方、ゴミの出し方などを紙に書いて家族に教えた。そして、家族で家事の分担を決めて、ぼくはご飯炊きの係と、自分のことは自分ですること決まった。

いよいよ、お母さんが入院をした。朝は自分で起きて、パンを焼いて食べて、学校へ行った。学校から帰ると、野球の練習へ行く準備をした。補食のおにぎりを初めて自分で作った。塩むすび二個だ。おにぎりの形が三角にならず、丸になったが、自分で作ったおにぎりは、おいしかった。練習から帰ると、まっ黒に汚れた練習着を洗った。ぼくが洗うと全然汚れが落ちなくて、その後はお父さんに洗ってもらった。お母さんがいない一日だけで、とても大変だと思った。

でも、いいこともあった。お父さん、お兄ちゃんたちは、自分の分担じゃなくても、家事をしてくれた。みんなが協力していて、ありがたいと思った。ぼくは家事をしたことはないし、やり方も知らないし、できないと心配していたけれど、やってみたら自分の将来のために役立つ経験だと思った。

お母さんが入院をして、一週間後、退院をすることになった。お父さんは、手術をして、歩けないお母さんのために車

いすや歩行器を用意した。お父さんと一緒に、病院にむかえに行くと、お母さん車いすで現れた。車いすに乗った姿がショックだった。ぼくはお母さんの顔を見ることが出来なかった。

病とうからろう下に出る時に、ぼくは初めてお母さんが乗った車いすを押した。思っていたよりも軽くて、すいすいと進んだ。エレベーターに乗った時は、大きな鏡がついている理由をお父さんが教えてくれた。車いすの人が回転させずに後ろ向きでも安全に降りれるようにとのことだった。ぼくは今まで、エレベーターに鏡がついていたことも気付かなかった。

病院から外に出ると、スロープや道路、マンホールに段差があって、車いすが何度も止まってしまった。目で見ても分からない段差が多く、車いすでの外出は危なく大変なことを知った。

そして、車いすを押して一番感じたことは、人の視線の多さだった。たくさんの人に見られている、注目をされていると感じた。それは正直嫌な気持ちだった。

ぼくは今回、お母さんがひざを痛めて車いすを使うようになったことで、たくさんのことを経験し、そして考えた。それは、人はみな平等に人間らしく生きる権利があるのに、一人一人は生きていく大変さが違うということだ。生まれながらに、病気や障害を抱えている人もいるし、突然、病気や事故やケガで体が不自由になる人もいる。一人一人違う生き方をしている人たちの人権を平等に守るためには、どうしたら良いか、考えたけれども分からなかった。

でも、お母さんが話をしてくれた。

「外でお母さんが乗っている車いすを押した時に、周りの視線が気になって嫌な気持ちがしたと言ってたよね。でもね、みんなが車いすの人を見ているのは、気にかけてくれてるってことなの。実際、お母さんが初めて一人で車いすに乗ってスロープを登ろうとした時に、坂の途中で止まりそうになったの。その時、後ろから知らない人が押しますよと声をかけてくれたの。他にもスーパーでは、上にある商品を取ってくれたり、車いすが通れるように道をゆずってくれたり、みんなとても親切なんだよ。きっと、何か困ってないか気にかけているから見ているんだよ。」と。

ぼくは、お母さんの話を聞いて、はっとした。確かに、困っている人を見かけた時に、一番良くないことは見ようとしない、助けようとしない、無関心であることだと思う。

ぼくは、お母さんが入院する前、家事は何もやらなかった。知らないから出来ないと決めつけていたからだ。でも、今は出来るようになり、家族で助け合うことが出来た。

世の中も同じことだと思う。社会の中には色々な人が生きていることを、まずは知るべきだと思った。それは自分で得た知識や経験は、自分のためだけではなく、人の役に立つことがあるからだ。

全ての人の人権を平等に守るためには、まずはお互いに関心をもつこと、理解し合うこと、思いやりを持つこと、そして相手の立場に立ち、行動する勇気が必要だと思った。

ぼくは、今年の夏に経験し、考えたことを自分の自信にして、困っている人がいたら、積極的に助けていきたいと思う。